

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

『国語に関する世論調査』の「慣用句等の意味や言い方」項目をめぐる言語規範意識（２）：  
新聞記事に見られる意識の変化

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 学習院大学人文科学研究所<br>公開日: 2026-01-20<br>キーワード (Ja): 『国語に関する世論調査』,<br>「慣用句等の意味や言い方」, 文化庁国語課,<br>言語規範意識, 新聞記事<br>キーワード (En): “Survey of Public Opinion on the<br>Japanese Language” , “the meanings and ways of<br>saying idioms” , Japanese Language Division of the<br>Agency for Cultural Affairs, Norm consciousness,<br>Newspaper articles<br>作成者: 新野, 直哉<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000589">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000589</a>                                                                                                                                                                                                                                                                                   |

# 『国語に関する世論調査』の「慣用句等の意味や言い方」項目をめぐる言語規範意識(2)

## —新聞記事に見られる意識の変化—

新 野 直 哉

### 論文要旨

文化庁国語課が毎年行っている『国語に関する世論調査』の「慣用句等の意味や言い方」項目に関し、調査者である国語課側の言語規範意識の変化について論じた新野(2024)に続き、調査結果を報じる新聞記事の記述に見られる意識の変化について、平成22～令和4年度の調査を対象に論じた。調査の結果、27年度までは、意味や言い方が「本来か非本来か」という国語課側の意識を「正しいか誤りか」に置き換えるという「変換」が記事の見出しや地の文、表・グラフの中に目立ち、さらに文化庁関係者のコメントとして出されているものの中にも見受けられた。しかし、28年度以降明らかにそれらが見られなくなる。これは、新野(2024)で見たように国語課側が最近になるほどメディアでの「変換」への不満・違和感を示し、何が「本来」かは知ってほしいがそちらにひき戻そうという意図はない、と強調するようになっていることを、新聞側が汲んで対応した結果と考えられる。

キーワード【『国語に関する世論調査』、「慣用句等の意味や言い方」、文化庁国語課、言語規範意識、新聞記事】

## 1 はじめに

筆者は、「誤用」と呼ばれるような事例を中心とした近現代の新語・新用法について、その発生・拡大の時期や経緯、今日の使用実態等に加え、同時代の人々がどう受け止めたのかという言語意識、中でも言語規範意識に注目し、研究を行ってきた(新野(2011、2020)など)<sup>1)</sup>。

そのような研究にあたり、文化庁国語課が平成7年度から行っている『国語に関する世論調査』(以下、単に「世論調査」とする)、特にそのうちの「慣用句等の意味や言い方」に関する調査の結果を参照してきた。その中で、この調査の意図とその結果に関する、文化庁関係者の発言や新聞記事の記述に見られる言語規範意識が、次第に変化していることに気づいた。

このうち、調査を行う側である文化庁関係者の意識の変化については、新野(2024)——以下「前稿」とする——で論じた。今回はそれに続き、この調査の結果を報じる新聞記事の記述に見られる言語規範意識の変化について論じることとする。

前稿では、平成22年度から令和3年度までの12年分を対象としたが、本稿では、前稿の原稿提出とほぼ同時に結果が発表された令和4年度までの13年分を対象とする。令和4年

度の調査結果に関する文化庁側の意識については稿末で扱う。以下、「平成（令和）〇〇年度の世論調査」は単に「〇〇年度調査」とする。したがって、本稿中の「〇〇年度」はすべて和暦である。

世論調査の結果については、文化庁ウェブサイトに掲載されている、国語課編集の「報告書」、さらにその概要をまとめた、PDF 版『「平成（令和）〇〇年度世論調査」の結果について』（以下、「結果の概要」とする）を利用した。

[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/kokugo\\_yoronchosa/index.html](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/index.html)

以下、引用中の { } 内は筆者による。

## 2 前稿のまとめ

まず、前稿で述べたことをまとめる。

- ・対象とする「慣用句等の意味や言い方」の問いとは、「慣用句などの言葉について、その意味や言い方を尋ねる問い」のことである。
- ・対象期間中の国語課側による調査結果報告記事（「結果の概要」・『教育委員会月報』）では、「本来の意味または言い方か、そうでないか」という捉え方で、「正」か「誤」か、という意識は示されておらず、さらに、最近になるほど、「本来・非本来」に「とされ（てい）る」「とされてきた」「辞書等で（主に）」といった表現が付加されるようになり、明らかに、「本来か非本来か」の断定を避けようという意識が強まってきている。
- ・一方、言語研究者・辞書編集者側には、この調査結果が「本来・非本来」→「正・誤」と「変換」<sup>2)</sup> されてメディアで報じられることで「本来」の意味・言い方の勢力が強まることに対し様々な意見があり、言語研究者からは、「国語に関する世論操作」（森 2014）・「国家を挙げての巧妙な矯正促進」（山田 2021）のように批判する声も出ている。
- ・国語課関係者の実名によるメディアでの発言では、このジャンルの問いは「一般受け」をある程度意識していることは認めつつ、最近になるほど、メディアでの「変換」への不満・違和感と、何が「本来」なのかは知ってもらいたいがそちらにひき戻そうという意図はない、ということを強調するようになっていく。これは、前掲のような言語研究者側からの批判が念頭にあってのことと考えられる。

## 3 「慣用句等の意味や言い方」の問いと項目

本稿の対象となる「慣用句等の意味や言い方」の問いと項目は、表 1 に示したものである（その選択基準は前稿を参照）。28 年度以降、「慣用句等の意味」「慣用句等の言い方」とも

に3項目という状況が続いてきたが、4年度では前者が5項目に増えた代わりに、後者の問いがなくなった。「慣用句等の言い方」の問いがないのは25年度以来である<sup>3)</sup>。

表1 「慣用句等の意味や言い方」の問いと項目

| 年度 | 「慣用句等の意味」の問いと項目                                                                                      | 「慣用句等の言い方」の問いと項目<br>(「本来」／「非本来」)                                                                     |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 22 | 25. 言葉の意味<br>「情けは人のためならず」「雨模様」<br>「姑息」「すべからく」「号泣する」                                                  | 26. 慣用句の認識と使用<br>「間が持てない／間が持たない」「古式ゆかしく／古式豊かに」「寸暇を惜しんで／寸暇を惜しまず」「声を荒(あら)らげる／声を荒(あ)らげる」「雪辱を果たす／雪辱を晴らす」 |
| 23 | 22. 言葉の意味<br>「煮え湯を飲まされる」「うがった見方をする」「にやける」「失笑する」「割愛する」                                                | 23. 慣用句の認識と使用<br>「舌先三寸／口先三寸」「食指が動く／食指をそそられる」「のべつまくなし／のべつまなし」「物議を醸す／物議を呼ぶ」「二つ返事／一つ返事」                 |
| 24 | 17. 慣用句等の意味<br>「役不足」「流れに棹さす」「気が置けない」「潮時」「噴飯もの」                                                       | 18. 慣用句等の言い方<br>「取り付く鳥がない／取り付く暇がない」「押しも押されぬ／押しも押されぬ」「的を射る／的を得る」「伝家の宝刀／天下の宝刀」「怒り心頭に発する／怒り心頭に達する」      |
| 25 | 22. 慣用句等の意味<br>「他山の石」「世間ずれ」「煮詰まる」「天地無用」「やぶさかでない」「まんじりともせず」                                           | (なし)                                                                                                 |
| 26 | 24. 慣用句等の意味<br>「おもむろに」「枯れ木も山のにぎわい」「小春日和」「天に唾する」                                                      | 25. 慣用句等の言い方<br>「青田買い／青田刈り」「熱にうかされる／熱にうなされる」「いやがうえにも／いやがおうにも」「眉をひそめる／眉をしかめる」                         |
| 27 | 22. 言葉の言い方—どちらを使うか<br>「鳥肌が立つ」「こたわる」「悩ましい」「〇〇系」「〇〇まくる」「固まる」<br>25. 慣用句等の意味<br>「奇特」「確信犯」「琴線に触れる」「名前負け」 | 26. 慣用句等の言い方<br>「あいきょうを振りまく／あいそ(う)を振りまく」「そうは問屋が卸さない／そうは問屋が許さない」「上を下への大騒ぎ／上や下への大騒ぎ」「寝覚めが悪い／目覚めが悪い」    |
| 28 | 27. 慣用句等の意味<br>「さわり」「ぞっとしない」「知恵熱」                                                                    | 28. 慣用句等の言い方<br>「言葉を濁す／口を濁す」「足をすくわれる／足下をすくわれる」「存亡の機／存亡の危機」                                           |
| 29 | 17. 慣用句等の意味<br>「檄を飛ばす」「やおら」「なし崩し」                                                                    | 18. 慣用句等の言い方<br>「采配を振る／采配を振るう」「溜飲を下げる／溜飲を晴らす」「白羽の矢が立つ／白羽の矢が当たる」                                      |
| 30 | 17. 慣用句等の意味<br>「惘然」「御の字」「砂をかむよう」                                                                     | 18. 慣用句等の言い方<br>「天地神明に誓って／天地天命に誓って」「舌の根の乾かぬうちに／舌の先の乾かぬうちに」「論陣を張る／論戦を張る」                              |
| 元  | 12. 慣用句等の意味<br>「手をこまねく」「敷居が高い」「浮足立つ」                                                                 | 13. 慣用句等の言い方<br>「新規まき直し／新規まき返し」「雪辱を果たす／雪辱を晴らす」「嚙んで含めるように／嚙んで含むように」                                   |

|   |                                                         |                                                                       |
|---|---------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 2 | 10. 慣用句等の意味<br>「がぜん」「破天荒」「すべからく」                        | 11. 慣用句等の言い方<br>「明るみになる／明るみになる」「寸暇を惜しんで／寸暇を惜しまず」「二つ返事／一つ返事」           |
| 3 | 12. 慣用句等の意味<br>「揚げ足を取る」「姑息」「割愛する」                       | 13. 慣用句等の言い方<br>「脚光を浴びる／脚光を集める」「声を荒（あら）らげる／声を荒（あ）らげる」「のべつまくなし／のべつまなし」 |
| 4 | 15. 慣用句等の意味<br>「涼しい顔をする」「忸怩たる思い」「情けは人のためならず」「雨模様」「号泣する」 | (なし)                                                                  |

## 4 新聞記事に見られる言語規範意識

### 4.1 新聞記事での「慣用句等の意味や言い方」関連記事

本稿で対象とするのは、前稿と同じく、「三大紙」と呼ばれる朝日新聞・毎日新聞・読売新聞の東京本社最終版の記事である。結果発表後翌月の同日付までの紙面を対象とした。各紙の記事データベース（順に『朝日新聞クロスサーチ』・『毎索』・『ヨミダス歴史館』）を利用し、「国語 調査」および「文化庁 調査」という2種のキーで記事本文の全文検索を行い、ヒットした記事から手作業で該当するものを選んだ。さらに、実際の紙面における当該の記事を各紙の縮刷版でも確認した。

「三大紙」の世論調査の結果に関する記事のうち、「慣用句等の意味や言い方」の問いの調査結果を載せる記事の見出しを一覧表にしたのが表2である。

さらに、各紙の社説と朝刊1面コラム（朝日「天声人語」、毎日「余録」、読売「編集手帳」）での、世論調査結果の取り上げ方について表3にした。なお、期間内でも、これら以外のコラムや、児童・生徒向けの啓蒙的（という性格が強い）記事は、「慣用句等の意味や言い方」の問いの調査結果に言及していても、今回は対象としなかった。

表2 「三大紙」の「慣用句等の意味や言い方」関連の問いの調査結果を載せる記事

- ・「結果発表日」は「年度」の翌年（例えば、22年度調査であれば23年の9月15日）になる。
- ・掲載はすべて朝刊で、末尾に掲載日（「年度」の翌年。以下の表も同）を示した。同じ日の紙面に複数の記事が掲載された場合は、掲載面も示した。
- ・記事見出し・執筆者は各紙の記事データベースによる。掲載日の後の数字は問いの番号。記号の意味は次のとおり。

○ 記事（見出し・本文と表・グラフ。以下同）の中で、その問いの全項目の結果を  
取り上げる

△ 記事の中で、その問いの一部の項目の結果を取り上げる

× 記事の中でその問いの項目の結果は一切取り上げない

例えば、22年度の読売の「25 ○、26 ○」は、「25. 言葉の意味」・「26. 慣用句の認識と使用」のいずれについても、記事の中で全項目の結果を取り上げている、ということを表す。

| 年度 | 結果<br>発表日 | 朝日                                                                    | 毎日                                                              | 読売                                                                                                                      |
|----|-----------|-----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 22 | 9. 15     | 「「寒っ」「すごっ」「うるさっ」…語幹のみの形容詞広がる 国語世論調査」(木村尚貴) (9.16) 25 ○、26 ○           | 「国語世論調査:「寒っ」8割超が許容「姑息」誤認多く「来れますか」過半数使う」(木村健二) (9.16) 25 △、26 △  | 「「ら」抜き言葉浸透中 10代7割「来れる」派 文化庁国語調査」(9.16) 25 ○、26 ○                                                                        |
| 23 | 9. 20     | 「気配り表現、お口に合いませんか 使用率減る 国語世論調査」(木村尚貴) (9.21) 22 ○、23 ○                 | 「国語世論調査:「むかつく」使う人、過半数「まったり」3割、広まる若者言葉」(石丸整) (9.21) 22 △、23 △    | 「「漢字書く力衰えた」66%メール普及 10年で急増 文化庁世論調査」(9.21・1面) 22 ×、23 ○<br><br>「「敬語使う」急増73%「社会全体、気を使う雰囲気」文化庁 国語世論調査」(9.21・32面) 22 ○、23 × |
| 24 | 9. 24     | 「「手紙は手書き」若者の理想? でも実際には減少 国語世論調査」(藤井裕介) (9.25) 17 ○、18 △               | 「国語世論調査:「ざっくり」定着」(福田隆) (9.25) 17 △、18 △                         | 「若者ほど「手書きで手紙」文化庁国語調査」(9.25) 17 △、18 ○                                                                                   |
| 25 | 9. 24     | 「意味、ずれてます 世間ずれ・やぶさかでない… 国語世論調査」(9.25) 22 ○                            | 「国語世論調査:「世間ずれ」若者無縁? 10代正解わずか5%」(三木陽介) (9.25) 22 ○               | 「「名詞+る」若者に浸透 国語に関する世論調査 挙動不審な態度…「きょどる」」(9.25) 22 △<br><br>「世渡り上手が「世間ずれ」 半数超「非常識」と誤解 国語の世論調査」(9.26) 22 ○                 |
| 26 | 9. 17     | 「「やばい」→10代9割「すばらしい」 国語世論調査」(佐々波幸子) (9.18) 24 △、25 ×                   | 「国語世論調査:「わたしの」的には」「…みたいな」増える、ぼかし言葉 14年度」(三木陽介) (9.18) 24 ○、25 × | 「国語に関する世論調査 ゲームやネット 子供の言葉に影響」(9.18) 24 ○、25 ○                                                                           |
| 27 | 9. 21     | 「「日本語を大切に」8割敬語重視の傾向強まる 国語世論調査」(守真弓) (9.22) 22 ×、25 ○、26 ○             | 「国語世論調査:「ら抜き言葉」初の多数派「見れる」「出れる」浸透」(佐々木洋) (9.22) 22 ×、25 △、26 ○   | 「絵文字 使う人 5割超 SNSやメール「親しさ」表す」(9.22) 22 ×、25 △、26 △                                                                       |
| 28 | 9. 21     | 「誤用? いえ「言葉は時代で変化」 さわり→最初の部分53% 知恵熱→頭を使った後40%」(後藤洋平) (10.21) 27 △、28 △ | 「国語世論調査:「存亡の危機」83%が使用「新語で苦労」55% 16年度」(伊澤拓也) (9.22) 27 ○、28 ○    | 「人と議論避け「空気読む」傾向 国語に関する世論調査」(9.22) 27 ○、28 △                                                                             |

|    |        |                                                                                                                                 |                                                                                     |                                                                                                                         |
|----|--------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 29 | 9. 25  | 「なし崩し・檄…使い方変化 ほほほほ、10・20 代に浸透 文化庁の国語調査」(上田真由美) (9.26) 17 ○、18 ×<br><br>「言葉の意味、多用され変化 広辞苑編集者 文化庁の調査読み解く」(上田真由美) (9.28) 17 △、18 × | 「国語世論調査:「なし崩し」本来の意味回答 2 割」(伊澤拓也) (9.26) 17 ○、18 ×                                   | 「上から目線」「ガチで」浸透 20 代の 6 割 「ほほほほ」使う 文化庁調査」(9.26) 17 ○、18 ○                                                                |
| 30 | 10. 29 | 「「慨然」「砂をかむ」など本来と違う使い方、広がる 国語世論調査」(上田真由美) (10.30) 17 ○、18 △                                                                      | 「国語世論調査: 国語世論調査 慨然(ぶぜん) 本来の意味は? 「腹を立てている」56% ○「失望しほんやり」28%」(水戸健一) (10.30) 17 △、18 △ | 「【御の字】【砂をかむよう】 本来の意味 理解 3 割台 文化庁調査」(10.30・1 面) 17 ○、18 ×<br><br>「言わずもがな」の危機 文芸表現離れ 25% 知らず 文化庁調査」(10.30・30 面) 17 ×、18 △ |
| 元  | 9. 25  | 「「○○活」「○○ハラ」、広く浸透 国語世論調査」(丸山ひかり) (9.26) 12 ○、13 △                                                                               | 「国語世論調査:「浮足立つ」のは… 本来「恐怖や不安で」26%、新解釈「喜びや期待で」60% 文化庁・国語世論調査」(大久保昂) (9.26) 12 ○、13 △   | 「「敷居高い」誤解 5 割超 国語調査 「高級で入りにくい」は ×」(9.26) 12 ○、13 ○                                                                      |
| 2  | 9. 24  | 「【破天荒】【がぜん】どんな意味? 本来の意味から変化「字から連想か」国語世論調査」(神宮桃子) (9.25) 10 △、11 △                                                               | 「国語世論調査:「不要不急」「3 密」定着 「そのまま使う」6 割超す 文化庁・国語世論調査」(9.25) 10 △、11 △                     | 「「破天荒」「がぜん」を理解 2 割程度 文化庁が国語世論調査」(福元洋平) (10.5) 10 ○、11 ○                                                                 |
| 3  | 9. 30  | 「「姑息」は“ひきょう”? 異なる使い方、浸透 文化庁の 21 年度国語世論調査」(神宮桃子) (10.24) 12 △、13 △                                                               | 「国語世論調査:半端ない・ぶっちゃけ 「気にならない」6 割 国語世論調査」(李英浩) (10.1) 12 △、13 △                        | 「スマホで手書き衰退 懸念 文化庁 国語世論調査 「言葉の使い方に影響」9 割」(10.1) 12 △、13 ×<br><br>「[あすへの考] 変わる言葉 正誤より共感 武田康宏氏 56」(福田昌史) (10.30) 12 △、13 × |
| 4  | 9. 29  | 「「推し」「盛る」「引く」世代超え定着、新しい表現は—— 国語世論調査」(平賀拓史) (9.30) 15 △                                                                          | 「国語世論調査:「推し」「盛る」世間に浸透 「気にならぬ」8 割、SNS 影響大 国語世論調査」(深津誠) (9.30) 15 ○                   | 「「推し」「盛る」広く浸透 文化庁国語世論調査 「気にならない」8 割」(9.30) 15 △                                                                         |

表 3 「三大紙」の社説と朝刊 1 面コラムでの取り上げ方

・「1 面」は朝刊 1 面コラムを指す。記号の意味は以下のとおり。

○ 世論調査の結果を取り上げ、「慣用句等の意味や言い方」の項目に言及する

△ 世論調査の結果は取り上げるが、「慣用句等の意味や言い方」の項目には言及しない

× 世論調査の結果は取り上げない

○△の場合は、掲載日を示した。さらに○の場合は、どの項目の結果に言及しているかを  
示し、社説の場合はタイトルも示した。

| 年度 | 朝日                             | 毎日                             | 読売                                                                     |
|----|--------------------------------|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 22 | 社説×<br>1面△ (9.17)              | 社説×<br>1面△ (9.16)              | 社説×<br>1面△ (9.17)                                                      |
| 23 | 社説×<br>1面△ (9.29)              | 社説△ (9.23)<br>1面△ (10.10)      | 社説△ (9.30)<br>1面△ (9.26)                                               |
| 24 | 社説×<br>1面△ (9.26)              | 社説△ (9.26)<br>1面△ (9.26)       | 社説×<br>1面○ (9.26)「噴飯もの」                                                |
| 25 | 社説×<br>1面○ (10.10)「煮詰まる」「世間ずれ」 | 社説△ (9.25)<br>1面○ (9.26)「世間ずれ」 | 社説○「国語世論調査 誤用に気づく契機にしたい」(9.26)<br>「煮詰まる」「世間ずれ」「まんじりともせず」<br>1面△ (9.26) |
| 26 | 社説×<br>1面○ (9.22)「おもむろに」       | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面×                                                             |
| 27 | 社説×<br>1面×                     | 社説△ (9.25)<br>1面×              | 社説×<br>1面△ (9.22)                                                      |
| 28 | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面△ (9.23)              | 社説△ (9.25)<br>1面△ (9.22)                                               |
| 29 | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面△ (9.27)                                                      |
| 30 | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面○ (10.31)「撫然」                                                 |
| 元  | 社説×<br>1面△ (9.29)              | 社説×<br>1面×                     | 社説○「国語世論調査 言葉は選んで大切に使いたい」(9.30)「敷居が <sup>4</sup> 高い」<br>1面×            |
| 2  | 社説×<br>1面△ (9.26)              | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面○ (9.25)「破天荒」                                                 |
| 3  | 社説×<br>1面△ (10.6)              | 社説×<br>1面×                     | 社説△ (10.1)<br>1面×                                                      |
| 4  | 社説×<br>1面×                     | 社説×<br>1面×                     | 社説△ (9.30)<br>1面△ (10.3)                                               |

まず表2である。各年度の問いごとに見ると、「×」つまり一切取り上げられなかった問いの数は朝日3・毎日3・読売2、「△」つまり一部の項目が取り上げられた問いの数は朝日11・毎日14・読売7となっている。読売が、もっとも「慣用句等の意味や言い方」の調査結果を大きく扱っている、ということになる。30年度以降は、「×」が、3年度読売の「13」

しかない。ここには、28～3 年度は項目数が 3 項目ずつに減っていることが関係していよう。

次に表 3 である。朝日は社説では世論調査そのものをまったく取り上げておらず、「慣用句等の意味や言い方」については 25・26 年度の結果に「天声人語」でふれるのみである。

毎日、社説では世論調査は 23・24・25・27 年度の四度扱っているが、「慣用句等の意味や言い方」の項目への言及はない。「余録」では 25 年度に一度言及する。

読売は、社説で二度、「編集手帳」で三度と、こちらでももっとも「慣用句等の意味や言い方」を頻繁に扱っている。令和に入ってから取り上げているのは読売のみである。

4.2 記事での「本来」「非本来」の表現

次に、表 2・表 3 の記事で「本来」「非本来」をどのように表現しているかを表 4・表 5 にまとめた（文化庁関係者の発言を引く箇所は「5」で見ろ）。「正誤」の立場からの表現は太字にした。「○（◎）」「×」もこちらに含む。「正」「誤」の文字がなくても、「○」あるいは「◎」がついていれば「正しい」、「×」ならば「誤り」、と読者は読み取る。

表 4 表 2 の記事での、「本来」「非本来」の表現

表・グラフがある場合は、そこでの表現のしかたを示した。その見方は、以下のとおり。

- ×・◎× 「本来」の選択肢に○あるいは◎、「非本来」の選択肢に×をつける
- ・◎ 「本来」の選択肢に○あるいは◎をつけ、「非本来」の選択肢には何もつけない
- 正** **誤** 「本来」の選択肢に**正**、「非本来」の選択肢に**誤**をつける

例えば、22 年度読売は、記事本文に「意味を正しく理解していない」という一節がある。また表・グラフは表のみがあり、そこでは「本来」の選択肢に◎をつけ「非本来」の選択肢には何もつけず「◎印が正解」という注記があり、タイトルは「誤った使い方や意味の取り違えの例」となっている。

「～」は具体的な意味や言い方が出ていることを示す。同じ表現が複数回使われている場合はその回数を示した。その年度の調査項目でない語について使った例は除く。

| 年度 | 朝日                                                              | 毎日                                                                  | 読売                                                    |
|----|-----------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 22 | 本文「誤りやすい言葉の調査項目」「誤用が、本来の意味での使用を上回った」<br>表○×なし。「上の選択肢が本来の言い方や意味」 | 見出し「誤認多く」<br>本文「本来と違う意味」「誤認が多い」「本来の意味である～」「～と正答した」<br>表◎×。「◎が本来の意味」 | 本文「意味を正しく理解していない」<br>表◎。「◎印が正解」タイトル「誤った使い方や意味の取り違えの例」 |

|    |                                                                          |                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                 |
|----|--------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 23 | 本文「本来の言い方」「本来～という意味」<br>表○×なし。「上の選択肢が本来の言い方や意味」                          | 本文「本来の意味が捉えられていない」<br>表○×。「○が本来の意味や読み方」タイトル「本来の意味が捉えられていない言葉」「本来の言い方をされていない慣用句」                                         | 本文「誤用が目立つ言葉」「本来の～」2、「誤用の～」「正しい～」<br>表○。「◎印が正解」タイトル「誤った使い方の例」(1面)<br><br>「意味を取り違えて使われている言い回し」「本来の～の意味」「正しく使っている」<br>表○。「◎印が正解」タイトル「味の取り違えの例」(32面)                                |
| 24 | 本文「本来の意味の～」「本来は～と言うところ」<br>グラフ○。「○が本来の意味」                                | 本文「間違っ理解している」「誤解する」「意味を間違えて理解していた」「間違っていた」<br>表○×。「○は本来の意味、×は本来とは違う意味」                                                  | 見出し「慣用句誤用」<br>本文「慣用句の誤用」「本来の～」2、「～と誤答した人」「～と勘違いしている人」<br>表正 誤。タイトル「誤った言い方の例」                                                                                                    |
| 25 | 見出し「意味、ずれてます」<br>本文「本来とは違う意味」2、「本来は～の意味とされる」「本来の意味と違う～」<br>表○×。「○が本来の意味」 | 見出し「正解」<br>本文「誤用している」「誤って使う」「正しく理解している」「正しく理解していた」「～と誤用していた」「本来は「ずれ」は「擦れる」の意味」「誤用」「誤用する人が多い」<br>表○×。「○は本来の意味、×は本来と違う意味」 | 本文「誤用」「本来の意味」「～と誤解していた」3、「～と誤解した」(9.25)<br><br>見出し「～と誤解」<br>本文「意味を誤解している」「本来の意味」2、「～と誤解していた」2、「～と間違っ理解していた」「本来の～と理解していた」「誤解が広まった」「正しく理解していた」「～と逆の理解をしていた」<br>表○。「◎が本来の意味」(9.26) |
| 26 | 本文「本来の意味の～」<br>表・グラフなし。                                                  | 本文「誤用6割超」「正しく理解していた」2、「～との誤用」「～と誤用していた」<br>表○×。「○は本来の意味、×は本来と違う意味」                                                      | 本文「本来の意味かすむ」「本来の意味の～」「本来の意味」2、「本来の～」4、「～という間違っ意味」「誤解していた」「正しい理解」<br>表正 誤。タイトル「慣用句の意味の取り違えなどの例」                                                                                  |
| 27 | 本文「本来の意味」「本来は～という意味」「本来の意味の～」<br>表○×なし。「上の選択肢が本来の意味や使い方」                 | 本文「誤解69%」「本来～という意味」「正しく理解している人」「～と誤解している人」「本来の言い方の～」「正しい使い方ではない～」「正しい使い方をする」<br>表○×。「○は本来の意味や使い方 ×は本来と違う意味や使い方」         | 本文「慣用句の意味や言い方を正しく把握しているかどうか」「本来の意味」「誤った意味」「正しい言い方」<br>表○×。                                                                                                                      |

|    |                                                                                                                                                       |                                                                                                                              |                                                                                                              |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 28 | 見出し「誤用? いえ「言葉は時代で変化」」<br>本文「本来の意味」2、「本来の意味とは異なる～」 「本来の言い方である～」<br>表○×なし。                                                                              | 本文「本来の言い方の～」 「本来の意味の～」<br>表○×。「○は本来の意味や使い方 ×は本来とは違う意味や使い方」                                                                   | 本文「本来の～」4、「本来の意味」<br>表○×。                                                                                    |
| 29 | 見出し「使い方変化」<br>本文「本来の意味」3、「本来の～」<br>表・グラフなし。(9.26)<br><br>見出し「言葉の意味、多用され変化」<br>本文「本来の意味」「本来の～」<br>表・グラフなし。(9.28)                                       | 見出し「本来の意味」<br>本文「○」「本来の～」 「本来の意味」2、「本来の意味の～」<br>グラフ○×なし。「本来の意味」                                                              | 本文「本来とは異なる意味」 「本来の～」 「本来の～の意味」<br>表○×なし。「本来の表現」「異なる表現」「本来の意味」「異なる理解」                                         |
| 30 | 見出し「本来と違う使い方」<br>本文「○」2・「×」2 (記事データベースには出ていない)、「本来の意味とは異なる使われ方」「本来の意味とされる～」 「本来の意味」2、「本来の～」2、「本来の言い方とされる～」<br>表○×なし。「本来の意味・言い方」、タイトル「本来の意味・言い方と異なる回答」 | 見出し「本来の意味」「○」<br>本文「本来とは違う意味」「辞書にない表現」「本来の～」2、「本来は～」 「辞書には載っていない～」 「辞書にはない～」<br>グラフ○×なし。「本来の意味」「本来とは違う意味」「本来の使い方」「本来とは違う使い方」 | 見出し「本来の意味」<br>本文「本来の意味」2、「本来の～」2<br>表○×なし。「本来の意味」「異なる意味」(1面)<br><br>本文「本来の慣用句と異なる表現」「本来の～」2<br>表・グラフなし。(30面) |
| 元  | 本文「本来と違う意味」「辞書などで本来の意味とされてきたものと異なる方」「本来の意味とされる～」 「本来の意味の～」2、「本来の意味」<br>グラフ○×なし。「本来の意味・言い方」、タイトル「本来の意味・言い方と異なる回答」                                      | 見出し「本来」「新解釈」<br>本文「本来の～」 「本来の意味とは異なる解釈」「本来の用法」「新たな解釈」「本来の～という意味」「本来の言い方とされてきた～」<br>グラフ○×なし。「本来」                              | 見出し「誤解5割超」「×」<br>本文「本来の意味で理解している人」「本来の～」<br>表○×なし。「本来の意味」「異なる理解」「本来の表現」「異なる表現」                               |
| 2  | 見出し「本来の意味から変化」<br>本文「本来とは異なる意味や言い方」「本来の意味とされる～」 「本来の意味とされてきた～」 「本来の言い方とされてきた～」<br>表○×なし。「本来の意味・言い方」、タイトル「本来の意味・言い方と異なる回答」                             | 本文「本来と違う意味」「本来の～」3、「本来と異なる～」<br>表・グラフなし。                                                                                     | 本文「本来の意味を理解する人」「本来の意味と異って理解していた人」<br>表○×なし。「本来の意味」「異なる理解」「本来の言い方」「異なる言い方」                                    |

|   |                                                                                            |                                                                         |                                                                                                  |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 3 | 見出し「異なる使い方」<br>本文「本来とは異なる意味や言い方」「辞書などで本来の意味とされてきた～」「本来の意味とされる～」「本来の言い方とされてきた～」<br>表・グラフなし。 | 本文「本来と異なる意味」「本来の意味」「本来の～と理解していた」「本来の～と読んだ」「辞書通り～とした」<br>グラフ○×なし。「本来の意味」 | 本文「本来の意味」「正しく理解していた」<br>表・グラフなし。(10.1)<br><br>見出し「正誤より共感」<br>本文「本来の意味とは異なります」<br>表・グラフなし。(10.30) |
| 4 | 本文「辞書で本来の意味とされてきたものとは異なる意味」「本来の意味である～」<br>グラフ○×なし。「本来の意味」                                  | 本文「本来の意味と異なる言葉」「本来の意味の～」「本来の～」3、「本来の意味」2<br>グラフ○×なし。「本来の意味」             | 本文「本来と異なる意味」「本来の意味」<br>表○×なし。「本来の意味」「異なる理解」                                                      |

表5 表3の社説・朝刊1面コラムでの、「本来」「非本来」の表現

「～」は具体的な意味や言い方が出ていることを示す。同じ表現が複数回使われている場合はその回数を示した。

| 年度 | 朝日                        | 毎日      | 読売                                                      |
|----|---------------------------|---------|---------------------------------------------------------|
| 24 |                           |         | 「誤解していた」「正答」4、「誤答」2、「正しい用法」                             |
| 25 | 「本来は～」「本来の意味」2、「正誤」2、「誤用」 | 「本来の意味」 | タイトル「誤用」<br>本文「本来の意味」「誤った使い方」「正しく使っている」「誤って」「誤用」「正しい意味」 |
| 26 | 「本来の～」「誤用」「正誤」            |         |                                                         |
| 30 |                           |         | 「本来と違う使い方」「正しくは～」「本来の意」                                 |
| 元  |                           |         | 「本来の意味」                                                 |
| 2  |                           |         | 「原義」「誤解」「本来の意味とは違う」「本来の意」                               |

前稿でも引いた勝田（2014：99-100）は、「新聞が文化庁の調査結果を記事にする際、「正誤」という単純な図式にして紹介する」（つまり、「本来・非本来」→「正・誤」という「変換」を行っている）例として、19年度調査の結果を報じる記事に「正しい答え」「正答できた」といった表現が見られることを挙げるが、今回対象とした期間ではどうか。

まず、表4である。朝日は期間を通じ明らかに太字が少ない。表・グラフでの○×は25年度を最後になくなる。本文では22年度に「恒例の誤りやすい言葉の調査項目」とし、さらに27年度で「奇特」は、本来の意味の「優れて他と違って感心なこと」と答えた人が半

数いたが、誤用の「奇妙で珍しいこと」も約3割いた」と、「本来の意味」と「誤用」を対で使うが、翌28年度では見出しで「誤用」云々を否定する。

毎日では、「<sup>はんぱん</sup>噴飯もの」や「<sup>さお</sup>流れに棹さす」の慣用句を、半数が間違っ理解していることも判明。7年前の調査でも同じ割合で誤解する慣用句が多くあり(24年度)、「まんじりともせず」「世間ずれ」の慣用句を半数以上が誤用していることが分かった。若い世代ほど誤って使う傾向があり(25年度)、「確信犯」という言葉は本来、「{中略}」という意味だが、正しく理解している人は17.0%。「{中略}」と誤解している人は69.4%にのぼった(27年度)など、30年度までは毎年記事のどこかで「変換」が行われている。

読売は、「慣用句の誤用が広がっている状況も浮かび上がった(24年度)」、「若い世代で誤用が目立った(25年度)」、「おもむろに」については、本来の「ゆっくりと」を選んだ人が44.5%。「不意に」という間違っ意味を選んだ人も40.8%いた。特に40歳代以下では6割以上が誤解していた(26年度)など、もっとも「変換」が目立つ。

全体的に、28年度以降は、太字が急に少なくなっている。朝日が30年度に、紙面には出ているが記事データベースには収録されていない本文(ただし、ポイントが大きく、見出しに近い印象)で「【**無然**】×立腹 ○失望してほんやり 【砂をかむ】×悔しい ○無味乾燥」と「○×」を使っている。毎日は29年度に本文(こちら、ポイントが大きく、見出しに近い印象)で「**なし崩し**」○少しずつ返す19%「**檄を飛ばす**」○考えを知らせ同意を求める22%とし、さらに30年度に見出しで“無然”の「本来の意味」に「○」をつける。読売は元年度に見出しで「誤解」「×」、3年度に本文で「割愛する」も、「{中略}」と正しく理解していたのは23.7%とする。

前稿で取り上げた、「本来・非本来」の断定を避けるための表現についてはどうであろうか。「とされ(てい)る」について見ると、朝日では25年度および29～3年度でつかない形と併用され、元年度以降は「とされてきた」も使われている。毎日は元年度に一度「本来の言い方とされてきた」が現れるのみである。「辞書等で」の類は朝日で元年度・3年度に「辞書などで本来の意味とされてきた～」、4年度に「辞書で本来の意味とされてきたもの」とあり、毎日は30年度に「辞書にない表現」「辞書には載っていない～」「辞書にはない～」、3年度で「辞書通り～とした」という表現を使っている。読売はいずれについてもまったく使っていない。

次に表5である。朝日の「天声人語」は、25年度は、“煮詰まる”について「本来の意味を回答したのは半数強で、4割は行き詰まる意味と答えた。{中略}ここまでくると、一概に正誤をいいにくくなるろう」、「世間ずれ」について「9年前発表の調査と比べると正誤の割合が逆転した。三省堂国語辞典第七版は誤用と明記しつつ、「世間の動きとずれていること」と説明している」とする<sup>4)</sup>。26年度は“おもむろに”の意味について「手元の辞書は「急に」を誤用だとしているが、正誤の基準も時とともに変遷することがあろう」とする。いずれも

「変換」を行ったうえで、「正誤」が絶対不変のものではない、ということを述べている。

毎日「25年度『余録』で「『世間ずれ』は」年代が上がるほど本来の意味を知る人が多くなる」と「本来の意味」をそのまま使う。

読売の「編集手帳」は、24年度には“噴飯もの”の選択肢に対し、

- ・「腹立たしくて仕方ないこと」(49・0%)と誤解していた人が、正答の「おかしくてたまらないこと」(19・7%)を上回ったという◆食べている飯を笑って噴き出す語源は承知しているが、正答・誤答の単純な切り分けが引かなかった。{中略} 怒りや不快感の生み出す苦い笑いが〈噴飯もの〉に必須の調味料だとすれば、さて、どちらが正答で、どちらが誤答か、訳が分からなくなってくる。

と、「本来」を「正答」、「非本来」を「誤答」と「変換」したうえで、その文言に注文を付ける。30年度は“慙然”について「立腹する様子」の意で使いがちだが、正しくは「失望してぼんやりする様子」だとし、2年度は“破天荒”を「豪快で大胆な様子」と解する」ことを「誤解」とする。

ここで興味深いのは、それぞれの結びの一節である。

- ・正答を尊重し、上司にお世辞でも言ってみますか。「部長のユーモアのセンスは噴飯ものですね」などと。(24年度)
  - ・かといって立腹の意が広がるいま、本来の意にこだわるのも困りものだろう。例えば職場でこう言ったとする。「課長、A君は企画を却下されて慙然としてましたよ」。気落ちした同僚を気遣うはずが、かえって課長の機嫌を損ねそうである◆言葉は世につれ…で仕方なしと思う。(30年度)
  - ・かといって、本来の意を大切にする言語習慣はリスクが恐ろしく高い。「社長、あなたの人生はとてつもなく破天荒ですね」。まず、お世辞には聞こえないことだろう。(2年度)
- 作例として職場での部下から上司へのセリフを挙げる、という同じ締めくくり方(上司の役職は、部長→課長→社長と上下しているが)になっている。30年度は、最後に「言葉は世につれ…で仕方なしと思う」と言語変化を容認(諦観?)する一文が加わっている。

読売の社説は、25年度はタイトルで「誤用」という語を用い、本文中でも

- ・本来の意味とは異なることを知らずに、誤った使い方をしている言葉はないだろうか。
- ・「世間ずれ」は正しく使っている人は3割にとどまり、半数以上が誤って、世の中の考えから外れている意味で用いていた。
- ・いずれの表現も、若い年齢層ほど誤用が多い傾向がある。調査結果を言葉の正しい意味を知るきっかけとしたい。

と、「変換」を繰り返し行っている。

それが元年度になると、「敷居が高い」について、

- ・「相手に不義理をしてしまい、行きにくい」という本来の意味を知る人が29%で、約

56%は「高級すぎて入りにくい」と思い込んでいた。

とする。「思い込んでいた」という表現からは、「非本来」へのネガティブな意識がうかがえるものの、「変換」した表現は見られない。終わり近くでは「言葉は今後も、やはり廃りがあるだろうが、ビジネスや公的な場では、正確に使うことが不可欠である」とするが、25年度と比べると明らかに「正誤」を問うという意識は薄くなっている。

## 5 文化庁関係者のコメントに見られる言語規範意識

続いて、表6として、表2の記事に「慣用句等の意味や言い方」の問いの結果に関する文化庁関係者（3年度の読売以外は匿名）のコメントとして直接話法あるいは間接話法で出ているものをまとめ、そこにどのような言語規範意識が現れているかを見てみる。「正誤」の意識が現れている個所はやはり太字にした。「同庁」はすべて文化庁のことである。

言うまでもなく、新聞記事に掲載されたコメントは、直接話法であっても、記事執筆者により編集・要約されたものであり、そこには記事執筆者自身の言語規範意識も関係してくる<sup>5)</sup>。しかし、新聞読者の中には、これを文化庁の公的な見解と受け取る人もあろう。

表6 表2の記事の文化庁関係者のコメント

| 年度 | 朝日                                                                                                                 | 毎日                                                                                                                | 読売                                                                    |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 22 |                                                                                                                    |                                                                                                                   |                                                                       |
| 23 | 文化庁国語課の担当者は「言葉の意味は時代とともに移ろう。本来の意味と違う意味も、使用が広がれば固定する可能性はある」と話す。                                                     |                                                                                                                   |                                                                       |
| 24 | 同庁によると「いくつかの言葉は経年で調査していて、結果が報道されると学校で問題が出されたり、酒の席の話題になったりして、本来の意味が広がるようだ」という。                                      | 7年前の調査でも同じ割合で誤解する慣用句が多くあり、文化庁の担当者は「誤って覚えやすい上、正しい用法を身につける機会が日常的に少ないからではないか」と話している。                                 |                                                                       |
| 25 | 同庁の担当者は、「『世間ずれ』の『ずれ』は『擦れている』ということだが、『ずれる』ということからの連想で、世の中から外れていると捉える人が増えているのではないか」と話す。<br>やぶさかでないは、「ただし」や「しかし」という逆接 | 同庁は「『慣用句の意味は』使われる頻度によって認知度に差が出ているようだ」とみている。<br><br>誤用する人が多いが認知度は高い慣用句について、同庁は「 <b>使い方の正誤</b> にかかわらず、ふだん使われているというこ | 文化庁国語課によると、「世間ずれ」の「ずれ」は「擦れる」の意味だが、「ずれる」と間違っ <b>て理解している</b> という。(9.26) |

|    |                                                                                                                                          |                                                                                                                              |                                                                                                                                   |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | <p>の言葉が続くことが多いという。そのため、積極的に考える人が少ないのではないかという。</p> <p>まんじりともせずは、「まんじり」という言葉が、じっと見つめるという意味で使われることがあるため、本来の意味と違う「じっと動かないで」と思う人が多いとみている。</p> | <p>とではないか」と推測している。</p>                                                                                                       |                                                                                                                                   |
| 26 |                                                                                                                                          | <p>文化庁は、「『枯れ木も山のにぎわい』の「非本来」の回答増は」日常的に使われなくなったことが要因ではないか」とみる。</p>                                                             | <p>文化庁は「日常的に使われない慣用句では、文脈から意味を推察する機会が少なくなっている。逆に過去の調査などで話題になり、本来の使い方が広まったケースもある」と分析。</p>                                          |
| 27 | <p>「『琴線に触れる』を」『逆鱗<sup>ぎゃくりん</sup>に触れる』と混同する人が多い（文化庁国語課）という。</p>                                                                          | <p>「確信犯」は」文化庁によると「故意犯」の意味で使われ始め、誤った解釈が広まったとみられる。</p>                                                                         |                                                                                                                                   |
| 28 | <p>文化庁国語課の担当者は「『知恵熱』の「非本来」の意味について」言葉は時代で変化するもの。明確な誤用というわけではない」と話す。</p>                                                                   | <p>文化庁は「『存亡の危機』は今も広く使われている。明確な誤用と言うのは難しい」としている。</p>                                                                          | <p>文化庁では「言葉は時代によって変わる。現実にも広く使われている場合は、誤用とは言いきれない」と話す。</p>                                                                         |
| 29 |                                                                                                                                          | <p>文化庁は「言葉は時代とともに変容する。本来の意味から派生した使われ方も誤りとまでは言えない」と説明している。</p>                                                                |                                                                                                                                   |
| 30 | <p>文化庁の担当者は「『“撫然”の』調査結果は授業でも扱われることがあり、若い人ほど本来の意味を学ぶ機会があるのでは」とみる。</p>                                                                     | <p>文化庁の担当者は「言葉の意味が変化する過程なのかもしれない」と分析する。</p> <p>文化庁の担当者は「砂をかむ」の使い方について「ハンカチのように、何かを『かむ』という行為を『悔しさ』の表れと解釈する人が多いのだろう」と分析する。</p> | <p>文化庁は「活字離れに伴い、慣用句の意味を文脈から推しはかる機会が少なくなった影響もあるのではないかとみている。（1面）</p> <p>文化庁では「『砂をかむ』は」『唇をかむ』のように、かむ姿が悔しさを連想させた可能性がある」と説明する。（1面）</p> |
| 元  | <p>文化庁国語課の担当者は「コミュニケーションをうまく進めるためにも言葉が変化している状況を認識してもらえれば」と話す。</p>                                                                        | <p>同庁は「『本来・非本来』のどちらが正しいということではなく、両方の使い方を知り、世代間などで誤解のないコミュニケーションを図っていくことが大切」としている。</p>                                        | <p>文化庁は「『敷居が高い』は」戦前の小説などでは本来の意味で使われていたが、現在では相手に不義理だという感覚自体がなくなってきたのではないかとしている。</p>                                                |

|   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |  |                                                                                                                                                                                       |
|---|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2 | <p>「『破天荒』を」 「豪快で大胆な様子」の意味と理解している人が多かったことについて、文化庁の担当者は「破る、荒いという字からの連想かもしれない。ただどちらの選択肢も『特に目立つ』という点ではつながっているところもある」と分析する。</p> <p>がぜんは漢字で書けば「俄然」。文化庁の担当者は「俄(にわか) 雨のように急な様子を表す。この漢字を使うことが少なく、『断然』という言葉に引っ張られている可能性がある」と話す。</p> <p>文化庁は「言葉は変化する。あくまで本来の意味や言い方との比較で、正しいか間違いかではない。場面に応じて言葉を大事に使い、豊かなコミュニケーションをとってほしい」としている。</p> |  | <p>文化庁は「『破天荒』の意味は」 「破る」「荒い」の語感からとらえ方が変化した可能性がある」とみる。</p>                                                                                                                              |
| 3 | <p>「姑息」について、文化庁の担当者は「本来の『一時しのぎ』が意味を広げたのではない。一時しのぎで済ませようとする、そこからやり方がずるい、ひきょう、というふうに広がったのでは」と推測。「割愛」は、「手放すのが惜しいと思っているかどうかは、他人にはわかりにくい。単なる省略と思われることがあるのではないかと話す。</p> <p>「声を荒らげる」については、「声をあらげる、というのは戦前の小説にも見られる。『荒(あら)い』『荒(あ)れる』のように、『荒』を『あら』『あ』と読む場合の両方があり、それが影響している可能性がある」と言う。</p>                                        |  | <p>「<sup>こそく</sup>姑息」という言葉をどういう意味で使っていますか？今年実施した「国語に関する世論調査」では「ひきょうな」という意味だと思っている人が73・9%に上りました。でもこれは本来の意味とは異なります。辞書と同じ「一時しのぎ」と理解している人は17・4%にとどまりました。2004年、11年の調査でも同様の傾向です。(10.30)</p> |
| 4 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |  |                                                                                                                                                                                       |

直接話法で引用される中に太字が見られるのは、毎日で24年度の「誤って覚えやすい」「正しい用法」、25年度の「使い方の正誤にかかわらず」がある。間接話法では、25年度の読売に「間違って理解している」、27年度の毎日に「誤った解釈」が見られる。その後、28年度の3紙、29年度の毎日に「言葉は時代で変化するもので、「非本来」でも誤用とは断言できない」という趣旨のコメントが載り、その後は元年度の毎日と2年度の朝日の、「正誤」を問題にしているのではない、と強調する発言しか見られなくなる。さらに、「とされ（てい）る」「とされてきた」「辞書等で（主に）」はまったく見られない。そして、4年度は、3紙ともこの問いに関する文化庁関係者の発言は掲げなかった<sup>6)</sup>。これは22年度以来のことである。

また、3年度調査の後には、読売に、国語課の武田康宏・国語調査官のインタビュー記事がある。そこに示された世論調査に関する意識については前稿で取り上げたが、3年度調査の「慣用句等の意味や言い方」項目に限って見ると、“姑息”について表に引いたようなコメントをしており、「本来」については「本来の意味」・「辞書と同じ～」という表現を使っている。

前稿では、この期間中の国語課側による調査結果報告記事では、「本来」を「正」、「非本来」を「誤」ととらえる記述は全く見られないことを確認した。それと比べると、少なくとも27年度までについては、今回見た新聞記事での発言に現れている言語規範意識は大きく異なる。

## 6 おわりに

本稿で述べたことをまとめる。

- ・「三大紙」のうち、世論調査の結果を報じる記事の見出し、地の文、表・グラフ、さらに社説・朝刊1面コラムで「慣用句等の意味や言い方」項目をもっとも大きく扱っているのは読売、「本来・非本来」→「正・誤」という「変換」がもっとも少ないのは朝日である。
- ・「三大紙」すべてで28年度の結果を報じる記事に「言葉は時代で変化するもので、「非本来」でも誤用とは断言できない」という趣旨のコメントが載り、以降の記事では「変換」の頻度が大きく落ちる。
- ・文化庁関係者のコメントでは、27年度までは、前稿で見た国語課職員の発言の趣旨に反し、「本来」を「正」、「非本来」を「誤」ととらえる発言が見られるが、28年度以降は見られなくなる。

27年度までは、記事の見出しや地の文等にとどまらず、文化庁関係者のコメントにも「本来」を「正」、「非本来」を「誤」ととらえるケースがあった原因が、実際にそのような発言

があったからなのか、それとも実際は「本来・非本来」の立場で発言していたものを新聞側が「正・誤」に「変換」したのか、あるいはその両方か、ということの検証は困難である。

いずれにせよ、28 年度の結果を報じる際に「三大紙」が足並みをそろえて「言葉は時代で変化するもので、「非本来」でも誤用とは断言できない」という趣旨のコメントを掲載し、その後目立って「変換」が行われなくなっていく。そして、前稿で扱った国語課関係者の実名での発言で、メディアでの「変換」への不満・違和感が明示・強調されるようになるのもこの時期からである。これは偶然ではなく、この時期に「三大紙」側が足並をそろえて国語課側の意向を汲んだことで、記事での言語規範意識の現れ方に変化が起きたと考えるべきであろう。

その結果として、近年の「三大紙」に見られる言語規範意識に関しては、「「ことばの乱れはここまで来た」の大合唱」(増井 2013: 41)・「「間違った表現が増えている」と見出しに書き立てる」(山田 2021: 24)といった状況ではなくなっている。このような変化は、記事を教材として教育現場で使うような場合にあっても、影響を及ぼすことになるだろう。

最後に、今後に残った世論調査の課題である。前出の武田調査官は、

- ・これまでの調査の中には、あまり社会で用いられなくなっている慣用句や言い回しなどが取り上げられている場合もあった。{中略} この点については、十分に留意していく必要がある。(武田 2021: 14)

とするが、具体的にどの項目がそれにあたるのかは示していない。

国語課側が挙げていない課題として挙げられるのは、質問文・例文や選択肢の文言の適切さの検証である。この件に関し、筆者は新野 (2013) で、23 年度の項目である「うがった見方をする」や“失笑する”について短く論じたことがあるが、他の研究者からも、23 年度の“にやける”、25 年度の“煮詰まる”の例文について指摘が行われている<sup>7)</sup>。さらに、24 年度の“噴飯もの”に対しては、「4.2」で見たとおり読売「編集手帳」が疑問を呈している。これらの大部分が、例文や選択肢の文言が、「非本来」つまり「誤用」視されうる方の回答に誘導するようなものになっていないか、という指摘である。こちらについても別の機会を考えてみたい。

#### 付 4 年度調査に関する調査者側の意識

前稿で扱った調査者側すなわち文化庁国語課側の意識について、4 年度調査に関するものを見ていく。まず、「結果の概要」における文言は、「言い方」に関する問いがなかったことによる変化を除けば、3 年度調査から変化がなかった。『教育委員会月報』では、元年度調査までは掲載されていた世論調査の結果を報告する記事が 2 年度についてはなく、3 年度には復活したが、4 年度には再度掲載されなかった。2 年度については町田互・国語調査官による町田 (2022) がその代替的な役割を果たしたが、4 年度は町田 (2024) が発表されたも

の、本文中で「慣用句等（「涼しい顔をする」「忸怩（じくじ）たる思い」「情けは人のためならず」等）についても尋ねた」とあるのみで、結果には言及しておらず、それに対する意識も示されていない。

## 注

- 1) 発表者は、カギカッコ付きの「誤用」を、〈辞書や「日本語本」等で、「このような意味（用法・形式）で使うのは誤りである」とされているなどして、「誤りである」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方」という意味で使う（新野（2020：2）参照）。また、「言語規範意識」とは、〈個別的な言語形式・言語使用・言語行動、あるいは言語一般・日本語一般に関する、「正しいか・誤りか」「使ってよいか・使うべきでないか」という問題をめぐる意識〉と定義する。新野（2020：1-14）参照。
- 2) 山田（2013：260-261）に、
  - ・この調査 {=世論調査} は、「正しい意味」ということばを使いません。あくまで「本来の意味」ですよ、と言っています。ただ、これがマスコミというフィルターに掛けられると、「本来の」ということばは「正しい」へと変換され、こんなに間違っ**て**使われているのだから直さなければなら**ない**と翻訳されていきます。とある。これをふまえ、前稿および本稿ではカギカッコ付きの「変換」を、〈「本来・非本来」→「正・誤」という変換〉の意で用いる。
- 3) なお、本稿執筆中に結果が発表された5年度調査では、「慣用句等の意味」が5項目、「慣用句等の言い方」が3項目である。後者は、「間、髪を入れず」と言うか「間髪（かんぱつ）を入れず」と言うか、のように、成句を区切って言う（本来）かそうでない（非本来）か、という前々年度までとは異なる観点からの問いになっている。
- 4) “煮詰まる”については新野（2022）など、“世間ずれ”については新野（2020）参照。
- 5) この問題については、新野（2014：40）で取り上げた。2012.9.21 付の朝日・日本経済・産経3紙朝刊の記事に出ている、23年度調査の結果に対する文化庁関係者のコメントが、前半部で「言葉は変化していくものである」という一般論を述べている点は共通しているものの、後半部に示された言語規範意識が、次に挙げるように大きく違っていたのである。
  - ・「本来の意味と違う意味も、使用が広がれば固定する可能性はある」（朝日）
  - ・「認識のずれが世代間のコミュニケーションを阻害すること考えられる」（日経）
  - ・「『非本来』の意味は| コミュニケーションの阻害要因にもなりかねないので、広がらない方が望ましい」（産経）
- 6) 「三大紙」以外では、日経9月30日付朝刊の記事で、「涼しい顔をする」について、
  - ・文化庁担当者は「字面から感情が見えない、動揺していない様子を連想するため 新しい意味が浸透しているのではないか」とした。とある。
- 7) “失笑する”については、新聞記事でも選択肢の文言に対し疑問が出ていることを新野（2013）で指摘したが、5年度調査でこの語が再度調査項目になっており、選択肢の文言は同じであった。経年

調査では条件をそろえる必要があるとはいえ、再考の余地がある。また、“にやける”については飯間 (2014: 47-48)、“煮詰まる”については加藤 (2014: 232) で指摘がある。

## 参考文献

- 飯間浩明 (2014) 『三省堂国語辞典のひみつ』三省堂
- 勝田耕起 (2014) 『国語辞典女子—今日から始める日本語研究』フェリス学院大学
- 加藤重広 (2014) 『日本人も悩む日本語—ことばの誤用はなぜ生まれるのか?』朝日新聞出版
- 武田康宏 (2021) 「『国語に関する世論調査』とは何か—国語施策の立案と興味・関心の喚起を目的として」『日本語学』40(2): 4-15 明治書院
- 新野直哉 (2011) 『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』ひつじ書房
- 新野直哉 (2013) 「学界時評 国語」『アナホリッシュ国文学』2: 186-187 響文社
- 新野直哉 (2014) 「『平成二十三年度国語に関する世論調査』をめぐる新聞報道」『言語文化研究』13: 35-45 静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会
- 新野直哉 (2020) 『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』ひつじ書房
- 新野直哉 (2022) 「『煮詰まる』の使用実態と意味変化の過程—現代日本語の「誤用」研究の一例として」『人文』20: 33-54 学習院大学人文科学研究所
- 新野直哉 (2024) 「『国語に関する世論調査』の「慣用句等の意味や言い方」項目をめぐる言語規範意識—調査者側の意識の変化を中心に」『人文』22: 95-114 学習院大学人文科学研究所
- 増井 元 (2013) 『辞書の仕事』岩波書店
- 町田 互 (2022) 「令和2年度『国語に関する世論調査』の結果からみる国語科の課題—生活の変化とコミュニケーション」『教育科学国語教育』64(3): 80-87 明治図書
- 町田 互 (2024) 「令和4年度『国語に関する世論調査』の結果からみる国語科の課題—言葉の間違いや分からない言葉、略語に対する反応」『教育科学国語教育』66(3): 84-87 明治図書
- 森 篤嗣 (2014) 「『国語に関する世論調査』は『国語に関する世論操作』になっていないか」『教育科学国語教育』56(9): 99 明治図書
- 山田敏弘 (2013) 『その一言が余計です。—日本語の「正しさ」を問う』筑摩書房
- 山田敏弘 (2021) 「授受表現の文法的逸脱表現」金澤裕之・川端元子・森篤嗣編『日本語の乱れか変化か—これまでの日本語、これからの日本語』21-46 ひつじ書房

## 付記

本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」の研究成果の一部である。

**Norm consciousness surrounding the survey on the “meanings and ways of saying idioms”  
in the “Opinion Survey on the Japanese Language” (PART 2)  
— Focusing on changes in the consciousness of Newspaper articles**

NIINO Naoya

Following Niino (2024), who discussed the change in the consciousness of language norms among the survey respondents of the Japanese Language Division of the Agency for Cultural Affairs regarding the “meanings and ways of saying idioms” item in the “Opinion Survey on the Japanese Language” conducted annually by the National Language Division, this paper discusses the change in consciousness seen in the descriptions of newspaper articles reporting the survey results, focusing on the survey conducted between 2010 and 2022. The survey results showed that up until 2015, the “conversion” of meanings and expressions from “original or non-original” to “correct or incorrect” was noticeable in the headlines, narrative text, tables, and graphs of articles, and was also seen in the comments made by Agency for Cultural Affairs officials. However, from 2016 onwards, this is clearly no longer seen. This is thought to be the result of the newspapers responding to the fact that, as seen in Niino (2024), the Japanese Language Division has recently expressed dissatisfaction and discomfort with the “conversion” in the media, emphasizing that they want people to know what is “original” but have no intention of bringing people back to that state.

*Key Words:* “Survey of Public Opinion on the Japanese Language”, “the meanings and ways of saying idioms”, Japanese Language Division of the Agency for Cultural Affairs, Norm consciousness, Newspaper articles